

英語の絵本を教材に活用した演習授業 (I)

—こども期の言語活動にかかわる保育者養成—

椿 ますみ

A Case Study on Picture Books as Teaching Materials For Preliminary Childcare Givers Assisting Language Activities in Early Childhood

Masumi TSUBAKI

はじめに

生まれてから人はどの様に言語を獲得していくのであろうか。多くの情報を脳内に取り入れ、ワードプロセッサのように処理する子どもの脳内と、言語を獲得していく仕組みについての研究は心理学や脳科学、言語学の分野で様々な方向から行われている。模倣・文字学習・発話学習をくりかえし大人に向けて発達していく幼児期の大切な言語獲得時期を、保育者としてかわっていく短大生の教養科目『基礎英語』『実用英語』に絵本を活用した。改良途中であるが、2年間の演習の成果を振り返り、専門職に就こうとする保育者（以降保育士・幼稚園教諭・子ども教諭のこと）養成校としての短大教育の中で、教養教育の英語がどこまで専門教育との接合性をもって関与できるか探り展望を試みる。

1. 対象の学生

(1) 保育者をめざす学生の英語力

入学生は変化している。教育制度だけをみても、変革の波はここ10年でも知識重視型の教育指導要領から、体験重視型の指導要領に移行し、この間生み出された「ゆとり」という新しいタイプの世代に対して、特に躍進するアジア諸国から、国際比較の学力差を見せつけられ、次に今は完全に新しい指導要領に育てられた入学生が次々と入学している。「ゆとり」で削減された小中高主要5科目の授業時間は、30年ぶりに復活した中で、英語科目はコミュニケーション能力強化に教科書や入試科目が改訂された。平成28年度から遡り、入学生の英語の学力を、入学時に実施するプレイスメントテストの結果から振り返る。

① 調査方法

プレイスメントテストとは、入学時の1年生全員に実施する養成校独自の英語能力判定試験で、平成15年から実施している試験である。実施当初これを基にクラス分けを行った時期があるが、教員数と時間割、部屋割りの都合で入学生の学力の様子を見るテストとなっている。問題の内容は英検（実用英語技能検定）3級程度の問題8割に対し、準2級1割、4級1割程度が盛り込まれている30問でリスニングは実施しない。表1のとおりである。

内容：読む・書く・話す・聞く英語4技能のうち“読む・書く”2技能に対する試験である。

表1 プレイメントテストの内容

試験形式	技能	問題形式	主な測定能力	配点(点)	配点比率
筆記	読む・書く	語句空所穴埋め	語彙・熟語・文法	15	30%
		会話文空所穴埋め	読解力、コミュニケーション力	5	33%
		長文・掲示文・eメール文の読解と内容一致		5	
		短文の並び替え整序	作文力	5	17%

調査対象：養成校S短期大学部幼児教育学科1部・3部の新入生200名

調査状況

調査期間：平成15年より各年基礎教養科目『基礎英語』第1講目、20分

調査場所：S短期大学部7号館8302、7501教室

② 結果と分析

本論の目的は、英語の絵本を教材に活用する意義と教養科目としての『英語』の可能性を探ることなので、年度を抽出し表2に表した。養成校幼児教育学科の平均正答率の変化から見る英語学力の推移である。

表2 入学生平成15・23・26・27・28年の平均正答率

年度(平成)	15年	23年	26年	27年	28年
平均正答率	78%	54%	55%	53%	54%

当学科は、開設されて55年の保育者養成校であり、ほとんどの学生が愛知・岐阜・三重・福井の中部地方出身者である。資格取得後、卒業すると地元や出身地の保育園・幼稚園で保育士・幼稚園教諭として働く。表2は、13年前に比べると低下している英語力を示している¹⁾。平成15年頃までは、学力のある学生が、選抜された上で、専門・実務教育を学修するため短大へ入る光景があった。その後、18歳年齢の減少、厳しい労働環境から伝え聞くこの職種の人気の低下、養成校の4大移行など様々な理由で変化が生じた。入学制度が変わったということも大きな原因で、短大には、図1に見るように多様化した入学方式で筆記試験なしで入学してくる学生が多くなった。同時に意欲や資質、適性を重視した面接試験が多く、学力は低下した。いわゆる選抜競争のない全入時代に突入している。

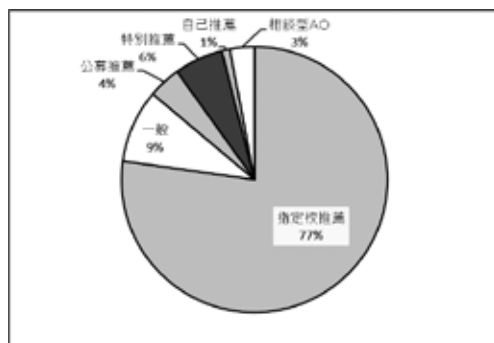


図1 平成28年度S大短期大学部入試方法

③ 専門教育の中の英語

幼児教育課程の授業は、保育士養成と教職課程の専門授業が養成校としての核をなし、教養

教育科目が必修・選択とその周りを取り囲む。英語は必修である。前期『基礎英語』（演習 1 単位）で中・高までの読む・書く・聴く・話す、の英語 4 技能を復習し、後期『実用英語』（演習 1 単位）で専門教育に特化した幼児英語を取り入れる。

入学時のテストを採点しても、日常の授業の中でも、教養科目としての英語の科目は、学生の能力、知識、関心、意欲の幅が大きすぎ、コンピュータでアシストしたり、厳しくしたり、担当の非常勤の先生の独自の指導法に依存しながらも英語 4 技能に焦点をあて、1 年間 2 単位として実施される。大学の英語教育の現状は課題だらけで、複数の大学で英語教育を語学の専門学校のプロ集団に委ねてしまっているところも現れ出した²⁾。

しかし、専門学校よりも教養教育を学べる学部、学科だからこそ、また、英語に自信のない学生が多いからこそ、その学校の独自性、専門性、地域性を活かし、短大の英語教育の可能性が上げられるのではないだろうか。一つの可能性への挑戦として以下に事例を示す。

2. 演習事例のねらいと目的

（1）英語の絵本を教材とするねらいと目的

養成校の専門教育科目『表現』では、絵本の活用目的、教育的な効果、子どもの情緒的発達への影響、母親や保育者の読み聞かせの意義を学修させたうえで^{3, 4)}、読み聞かせの方法を学ぶ。絵本の読み聞かせは子どもの興味、情緒的発達、想像力、言語能力を刺激する。また、読み聞かせる人間の肉声は、親（保育者）が子どもの精神状態を落ち着かせるための最も強力な道具であると言われ、動画や映像ではできないことである。絵本を通した子どもとの最高のコミュニケーションツールである。音となる言葉は文字より想像力を刺激する⁵⁾。また『造形』科目では挿画や造本の技術をも学ぶ。英語の絵本を教材として学ぶ専門科目の支援体制は出来上がっているのである。

英語の絵本を読み聴かせた場合も同様である。本学科で、専門教育で鍛えられている保育者の卵たちに教養教育として英語がどこまで関わり、迫り来る英語教育革命に迎えられるかを試したい。準備期といわれる生後 90 日頃よりスタートする言語生活わずか 4・5 年の子ども達にとって、大人が感じるような母語と異言語の境界線はあまりない。絵本の読み聞かせ音の響きと挿画が子ども達を想像の世界に誘い、音遊びに興じ、自ら想像し推測する世界は際限なく広がっていき、語学の領域を越えていく。英語の音での読み聞かせには韻（rhyme）やリズムなど、日本語にない子どもの聴覚に訴える独特のものがある⁶⁾。内容は大人にとって異文化のものも、子どもにはもともとすべてが異文化なのであるから、謎と遊びと創造に満ちた魅力あふれる未知の世界なのである。英語の時間に、英語の絵本を読み聴かせ、日本語に訳して語りかけるための洗練された日本語を推敲するという課題を与え、それに幼児教育の専門教育科目での知識と技術を加え、対象年齢の日本語児の心に響く絵本つくりと読み聞かせのプレゼンテーションを目標として挑戦した。

（2）『実用英語』実践事例について

① 時間配分

『実用英語』後期 15 コマ中 8 コマを使用し、90 分のうち 45 分は通常のテキスト『保育の英語』（成美堂）残り 30 分を絵本の製作と発表に使用した。最終 3 コマはプレゼンテーション（読み聞かせ発表）に使用し、クラス全員で鑑賞しあった。

② 予行演習

前年度、制作手順を紙面と口頭のみで伝えたために混乱を生じた学生が出たため、当年度の1コマ目は全員で一冊の絵本『Who's behind me?』(作: Toshio Fukuda 訳: Mia Lynn Perry)を訳し、完成するまでの手順をクラス全員で学んだ。当作品の内容は、頁をめくる度に、次にはどんな動物が登場するか、読者の子ども達に予測させ、ドキドキ、ワクワクさせる。馴染みの動物の名前を覚え、最後には「ほら自分の周りには、多くの仲間がいるよ」と気づかせ、友達存在を確認し合う優しい話である。日本人作家の逆翻訳で学生には訳し易い。登場する動物は擬人化され、心も意思もあるように描かれている。前年度の反省を反映し、翻訳・製作上の課題と注意事項は以下の通りとした。

*対象は2歳の子どもである／翻訳は対象児にわかる言葉であること／絵は下手でもいい、写し絵をしない／1匹だけ原本にない動物を入れる／位置関係を示す前置詞を文法的に学ぶ／既成の日本語版を決して見ない。などである。全員で行うリハーサル課題とした。

③ 絵本制作: 準備とことばの訳

つぎは本番である。USAより簡単な英語表現の幼児向け絵本、日本で訳されていないものを中心に、簡単なものから難しい小学校低学年用の内容まで100冊(Scholastic社、USA)を取り寄せた。出来るだけ学生が同じ絵本を選ばないように、課題の本を選ばせた。後期は各学生の学力の把握が出来ているので、選ぶ際相談されればもちろん答えた。教師は100冊全部に目を通し、難易度別に分類した上で表紙に難易度別シールを貼って分かり易くし見守った。絵本選択から導入部分の注意事項は以下の通り。

*自分の興味と語学力に応じたものを選ぶ／色の名前、数字やアルファベットのみの学習絵本は避ける／挿画は得意・不得意に関係なく楽しく描く／同時進行で訳をする／2歳児対象のWho's behind me?と異なり、対象年齢を自分で定め選書する／清書・製作の前に日本語訳の添削を教師に必ず受ける。添削の段階では次のような指導を行った。

*対象児に理解できない表現・言葉は避ける。日本の子どもに理解できるものに置き換える。(異文化理解と子どもの発達・認知の理解)

*中・高で行った文法中心の直訳は避ける。(彼女は・・彼は・・・・・することができない等、という表現は使わない。)(言葉の精査)

*擬音語は日本の生活の中から置き換えを探す。よく推敲する。

*現在形、過去形は、物語の総合的な展開に合わせ、原書通りでなくてもよい。

*同一の単語の繰り返しにはさまざまな日本語訳を試みる。例として“A very hungry caterpillar”(作: Eric Carle 訳: もりひさし)には4カ所に“still”が繰り返し出てくる。翻訳家もり氏の訳は 1回目／まだ→2回目／やっぱり→3回目／それでも→4回目／まだまだ、と変化に富んでいる和訳のすばらしさを絵本とともに紹介する。

制作時間には個人差があり作業が丁寧でスローな学生は、自宅での課題となった。

(3) 挿画

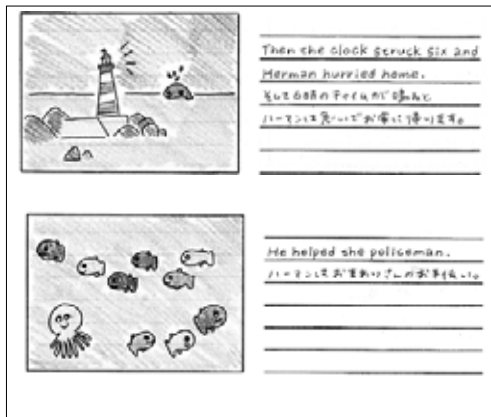
絵本は絵とことばという異なる2種類のコミュニケーション方法の組み合わせである。今回は造本を目標とせず、下手でもいいが、以下の注意を添えた。*内容をきちんと表している、対象子どもの感覚に合っている、正確で、漫画的でない、色彩・コラージュ・しかけ・材料などは問わない、絵は評価の対象ではないが、かき写した絵でないことなど注意を添えた。

(4) 発表

前年度には課題の多く残った発表である。朗読・音読の練習不足で恐ろしく下手である。今

年度は次の注意を行った。＊英語の朗読を発表の前に最低家族1名、友人2名に合格点を得てから発表すること。次の発表者は前の発表者の補佐をする。書画カメラとマイクを使用しクラスメイト全員を対象児に見立てて行うこと。当番に欠席したり、準備ができていないと不合格とする。残りの学生は受講ノートに感想コメントを書きながら聴く。

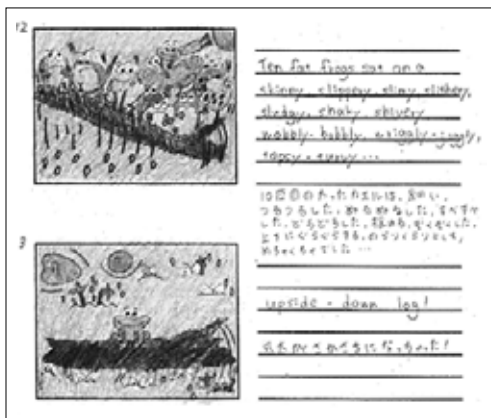
(5) 学生の作品から



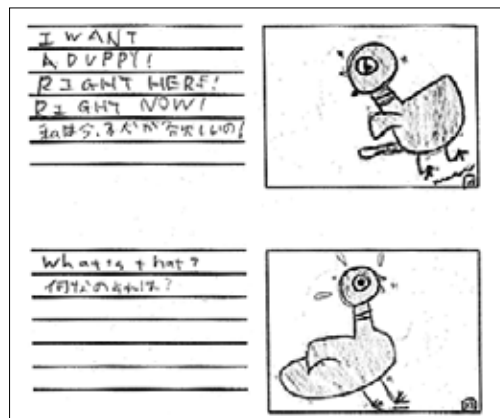
学生Aの作品



学生Bの作品



学生Cの作品



学生Dの作品

学生Aの挿画は自分で創作した絵である。主人公のハーマンは2頁目から英文では“He”で描写されるが、最後までハーマンと訳すことで絵本としての完成度を上げた。学生Bの絵本のテーマは、モーとしか泣けない豚の話で、誰でも皆と異なっていていいんだよというメッセージが込められたかわいい内容の絵本である。絵も文も子ども達を意識した良い作品となった。学生Cは、カエルが丸太に1匹、2匹・・と乗って行った末にひっくり返るという単純繰り返しの数字を教えるものだが、その中で多くの形容詞を学ぶ教育的要素の高いものである。絵が得意なCの絵も訳も学友がため息をつくほど良質であった。学生Dは、学業不振で英語も苦手な学生であるが、犬(puppy)という響きだけで飼いたいと駄々をこねるいたずらな鳩の簡単な絵本を選び、訳や絵は下手だが雰囲気とニュアンスをよくとらえて、少ない言葉で良い発表だった。

表3 学生の振り返りシートより抜粋

① 翻 訳	<p>訳した日本語を子ども向けの言葉に直すのがためになりました。</p> <p>ただの訳が子どもに伝わるように工夫するのが大変でした</p> <p>英語の使い方、こんな訳になるんだと発見が多かった。</p> <p>きれいな訳を発見した時は達成感がありました。</p> <p>自分で訳なんてできないと思っていたけれどできました。</p> <p>擬音語の訳が辞書になく苦労しました。</p> <p>訳も絵も子ども達にわかりやすくというところを頑張りました。</p> <p>直訳してから子ども達にわかりやすい言葉に直すのが難しかった。</p> <p>子どもの世界では“彼・彼女”なんて言わないことを知りました。</p>
② 挿 画	<p>苦手だと思ったよりよく取り組めた。発表は下手でした。</p> <p>訳から絵まで丁寧に仕上げられた。自信がつきました。</p> <p>まさか英語の授業で絵を描くとは思いませんでした。</p> <p>挿画することで英語が楽しく感じられました。</p> <p>完成させてみて英語が少し好きになっていました。</p> <p>保育英語をやってみて英語が嫌いなわけではないと気づきました。</p>
③ 発 表	<p>他の人の作品も素敵でした。</p> <p>理解して相手に伝えていく大切さを知りました。</p> <p>人前で発表するむずかしさと楽しさを知りました</p> <p>最後の発表が上手くできて満足度があがった。</p> <p>発表では伝えるという意識をもって話しました</p>
④ 全 体 の 感 想	<p>苦手な英語を克服したとまでは言えませんが自信がつきました。</p> <p>もうすこし難しいのを選べばよかったです。</p> <p>家に持ち帰る課題が多く大変でした。</p> <p>英語の絵本の良さを知れました。</p> <p>文の量の多いのを選んでしまって後悔しましたが最後までやれました。</p> <p>絵と文が最後に完成した時は感動しました。</p> <p>はじめての英語の本でした。面白いと思いました。</p> <p>正解がなく大変でした。はじめて英語を考えました。</p> <p>選んだ絵本に出会えてよかったと思う。可愛くできたので大事にしたい。</p> <p>英語に力を入れている保育施設に就職したら役に立てようと思う。</p> <p>英語が苦手でしたが今回楽しさを知りました。</p> <p>難しい作業だったけれど楽しくできました。</p>

た。その後の授業への参加態度が急改善した。

（６）振り返りシートから

終了後の学生の振り返り（reflection）シートの感想と反省を①準備とことばの訳②挿画③発表（プレゼンテーション）④全体の感想、と4つに分類し表3にまとめた。

- ① の訳については、ほとんどの学生が難しかったという。今まで学んできた英文と比較すると短い英文の翻訳である。簡単な日常的な単語で子どもの世界が描かれているが、繰り返し、擬音語、ユーモア、子どもの世界の謎などが含まれていて、動物や植物が出てきても擬人的な表現が使われ、科学的な知識が必要な場合もある、気づきや文法力も必要である。直訳はできるが対象年齢の子どもがわかる日本語でという課題に苦労した学生が多い。
- ② の挿画については、今回は厳しい課題を与えなかった。しかし英語に対して自信のなかった学生が、易しい本を選び、得意の描画で完成度を上げ、英語に対しても自信をもって真摯に取り組んでいく姿勢が見られた。中には発表の際にクラスメイトから喝采を受けるほど優秀な絵を披露する人もいた。材料は自由だったので、絵具、墨、ちぎり絵、クレヨン、色鉛筆、パステル、鉛筆さまざまであった。
- ③ の発表については、指導者の指導不足であるが、今回一番の反省である。一人一人の発話指導ができず残念であった。日本人学生同士は理解できるが、幼い子どもに訴える表現力をつけることが困難であった。英語の発話指導は指導者の今後の課題である。プレゼンのみならず子どもの前での指導力は、今後様々なシーンで鍛えられなければならない。絵本の読み方をどのように工夫すればよいか。子どもは、言葉を話すようになった2歳頃から象徴機能がどんどん発達する。紙芝居を楽しみ、繰り返しのある言葉の模倣を楽しむ。3歳児になると絵本や童話の内容が解り、イメージを持って聞けるようになる。4歳児では無生物や動物たちまで自分と同じ心があり、空想力、想像力が発達してくる。5歳児になるとそれを自分の経験と結びつけたりする。また、この想像力は子どもの創造性につながる重要なものである⁷⁾。頁をめくる度に見たい、聞きたい、知りたい、という探求心や好奇心を膨らませる、そんな言葉と絵の制作を奨励していかなければならない。
- ④ の全体についての感想・反省は、着手した時の戸惑いや不安、英語への嫌悪感は薄れ、むしろ楽しさや自信をみつけたとコメントしている学生が多い。驚いたのは、幼少時に英語の絵本だけでなく日本語の絵本にも接している学生が少ないことである。この課題で、初めて英語の絵本の楽しさ・面白さ・挿画の美しさなど発見した学生が多かった。

3 展望：専門教育と英語教育の接合

私たちが専門家教育を考えたとき、研究者たちは本当の知識は、まず初めに基礎科学と応用の理論と技術の中にあって、学生たちが関連の科学を学んだあとに、具体的問題解決のためとして技能が生まれてくる⁸⁾。短大の専門家教育の場合は、2年という時間の中、何もかもが同時並行に習得していく。何週間かの各地での実習を終えた頃が、すべての学んだ関連科目が知識として修まり強い力を開花させるが、慌ただしい。制度化されたカリキュラムの中で、教養教育科目は専門教育の架け橋的接合を果たさなければならない、といつも心に唱える。近年、保育者に、外国語活動に対応できるグローバルな感覚を備えた資質が求められる。しかし、1章で示したように、英語の学力の面からは英語に背を向けた、自信がない学生が入学してくる

ようになっており、特に短大では専門教科に忙しく、基礎教養とともに総合的に学問しようとする意欲ある学生は少ない。

（１）英語教育改革

平成30年度から小学校外国語活動・外国語（英語）教育が本格的に始まる。就学前の乳幼児に関わる保育者として、幼稚園・保育所・認定子ども園でのインターナショナルな就労を期待するわけではないが、多様な文化背景を持つ子どもやその保護者に対し、グローバルな感覚を身につけた保育者であってほしい。文部科学省はこれからの学校教育の中で、「英語が使える日本人」の育成を掲げ、教育振興基本計画の中に、グローバル化に対応した英語教育改革の計画を入れてきた。まず小学校に活動型と教科型の授業が盛り込まれ、中学では英語の授業そのものを英語で、高校では更にその内容を高度化し、さらに英語教育改革は高大産連携のものに発展させていくという構えだ。小学校低・中学年では週1～2コマの活動型の授業であるが、5・6年生では英語が教科化されるのだ。それを意識しない幼稚園はないだろうし、教科化することには保護者は真剣になる。社会人となる最後の教育機関での英語教科を有意義なものにしたい。保育現場に出てからなにがしかの自信やツールになれば、もし英語にコンプレックスがあるのならば、少しでも軽くしてやりたい。しかし、学生間にある能力、知識、関心、意欲の差をどう乗り越えよう。専門教科に取り組む学生の姿を見て、子どもが好き、子どもと関わるツール、表現手段を常に探っているのが学ぶ学生たちの共通した姿勢であるところに着眼し、たどり着いたのが、英語の絵本翻訳と発表であった。

（２）教職課程、幼稚園教育要領・保育所保育指針改革⁹⁾

10年に一度は保育士・幼稚園教諭の教育指針改革がなされているが、このたびの中央審教員養成に関する改革の具体的方向性については、平成28年の教育職員免許法改正、さらに改革案の施行に向け様々な規則改正が進行中である。幼稚園教諭教職課程においては、自主性や独自性のある教育内容は認められるものの、質の高い保育者を養成するため全国の養成教育機関に創意工夫ある教育内容の見直しが求められている。

平成29年3月31日告示のあった『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領』のうち、『幼稚園教育要領』第1章総則第5第3項には「海外から帰国した幼児にたいする指導内容や指導方法の工夫」が求められ、「安心して自己を発揮できるように配慮」、第2章「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の5領域の『環境』には「国際理解の意識の芽生えを養う」、との項目がある。異文化を背景にした子どもの最善の利益を考慮し、人権に配慮した教育と保育の人的環境つまり保育者の質が問われているのである。その領域に少しでも効果をもちこみたい英語教育である。

子育てで支援として外国籍の保護者に対しても、私たちの育てる保育士に、偏った異文化理解や言葉のコンプレックスによる消極的なコミュニケーション不足を絶対させてはいけない。異言語母語話者に対しても臆することのない発信力をつけさせてやるのがこの事例のねらいであった。

おわりに

子育てに、絵本は読む側も聞く側も単純に楽しい。海外の絵本を解釈し、自分の手で日本の子ども達用に作り直し、肉声で伝える、という作業を授業の中に取り入れた事例であった。第

2章の学生たちの振り返りシート④からもわかるように、反省も多かったが、苦しいながらも達成感のある課題であった、英語が嫌いではなくなったようだ、と習熟度に関係なく、英語の絵本や英語そのものに目を開かせる課題ともなった。同時に自分たちが何気なく乱雑に使っている日本語に注意を向けることもでき、2重の収穫であった。

子育て観は英語母語話者との間で違いがある¹⁰⁾。語彙獲得の月齢児たちについていえば、日本語児は、英語児に比べ疑似語や音韻反復などを持つ育児語多用の発話の中で育つため、育児語表現の少ない英語児の子ども達より、ゆっくりと穏やかに言語を獲得していき、反面、日本の保育環境は、情緒的なコミュニケーションの確立を大切にしている¹¹⁾ことが証明されている。早期の英語教育がよいかという議論ではなく、学生達には、子育て観の文化的な違いを学びつつも、ゆっくりと、語彙獲得以外のところではポジティブに、一人の保育者としてかかわってほしい。日本人の発話スタイル、日本人の言語獲得の良い点を理解した上で指導者として関わっていかねばならない。ここでは、英語・日本語関係なく、子どもの想像力が創造性を生み出し、感動する心を繰り返し体験させる、絵本の力だけではないが、そのような仕掛けづくりのできる保育者になってもらいたい、という願いで英語の授業にこの事例を導入した。短大1年生の第2言語習得の授業は乳幼児の母語習得とは異なる。子どもに向けた英語絵本の訳と読み聞かせ指導で、日本語児に対する認知的発達を促す道具としての絵本の力がツールとなることを学生たちに学ばせることができたと確信する。常に短期大学という専門教育の中で、教養教育の果たす役割について考えさせられている著者自身も、反省的に保育士養成に貢献できる教養教育の見直しの必要性を再確認することのできた演習事例となった。

参考文献

- 1) 椿ますみ、特殊英語検定を導入した事例とその成果—専門教育を受ける学生を対象に一、修文大学短期大学部紀要 第55集、pp133-142 (2016)。
- 2) 清水亮、共通教育科目の課題と挑戦、大学教育学会第39回大会発表要旨、於：広島大学総合科学部 (2017)。
- 3) 昆布孝子、教材としての英語絵本を活用—幼児教育学科における英語演習の授業—奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要 第44集、pp137-146 (2013)。
- 4) 昆布孝子 (2014) 教材として英語絵本の活用 (2) —英語絵本の多読授業—奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要 第45集、pp139-148 (2014)
- 5) W.J.Ong Jr., 林正寛、糟谷啓介、桜井 直文訳、声の文化と文字の文化、藤原書店 (1991)。
- 6) 脇本聡美、絵本の中の認知的道具、神戸常葉大学紀要 第10号、pp89-96 (2017)。
- 7) 尾崎恭子、幼児の精神発達と絵本、中国学園紀要 第4集、pp61-67 (2005)。
幼児教育学科における英語学習—保育英語と英語絵本— 第46集、pp171-186 (2015)
- 8) D. ショーン著、佐藤学、秋田喜代美訳、専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える、ゆみる出版 (2001)。
- 9) 全国保育士会編、保育所保育指針／幼保連携型認定こども園教育・保育要領／要支援教育要領、全国社会福祉協議会 (2017)。
- 10) 奥村優子、小林哲生、大嶋百合子、ことばの発達、日本語と英語で何が違う？ NTT技術ジャーナル、pp21-25 (2016)。
- 11) A.Fernald & H.Morikawa, Common themes and cultural variations in Japanese and American mothers' speech to infants, Child Development Vol.64, No.3 pp637-656 (1993)。

